

真 珠 技 術 研 究 会

會 報

47号



才 3 卷 才 2 号  
(September, 1964)

## 目 次

- (1) 飽和食塩水による  
ポリキーターの駆除について……………船越 将二… 1
- (2) 濃食塩水による  
貝殻寄生虫の駆除について(Ⅱ)……………協 専一… 7  
山口 菊男
- (3) 核の1個入れと  
2個入れとの比較について……………大須賀正二…11
- (4) ピースの扱い方(続き)……………町井 昭…15

× × × × × ×

- 全真連だより**……………21
- (イ) 阿児地区真珠技術研究会……………21
- (ロ) 紀州地区真珠技術研究会……………22
- (ハ) 第1回九州ブロック真珠事業協議会……………24
- 大月さんの死を悼みて……………井上 巖…31

**編集後記**

# 飽和食塩水によるポリキーターの駆除について

船 越 将 二

(真珠研究所大村支所)

近年、ポリキーターによる被害は、真珠産業にとって憂慮すべき大きな問題となつてきており、現在、真珠養殖の行なわれている所では、被害の大小はあれ、ほとんどといつてもよいほど広い範囲に病害があらわれているようであり、長崎県においても、夏季や避寒中にみられる斃死現象の大きな原因の一つとして、ポリキーターの寄生をあげることができるようであります。したがつて、ポリキーター駆除対策の早急的確立が切望されており、各所において研究が続けられていますが、大村支所においても38年度より駆除試験を行なつてきているので、その経過の概要について述べてみたいと思います。

## I ポリキーターの寄生状況および被害調査結果

ポリキーターのすべての種類が貝殻に孔をあけてはいりこむのではなくて、穿孔能力を持つのは数種であります。その内ポリドラが最も大きな害を及ぼすようであります。こころみに、大村湾内の一漁場で養殖している4年貝について、寄生しているポリキーターのうちでポリドラのしめる比率を調べてみたところ、73%という高率を示しましたが、その後の調査結果でも同じような傾向を示しているようであつて、いかにポリドラの寄生が多いかがうかがわれると思います。

昭和38年9月、大村湾奥部の漁協から例年になく2年貝の死亡が多いという連絡があつたので調査したところ、15%の斃死率を示しており、寄生状態は中程度と重症をあわせて36%に達しておりました。そして、死貝の80%は貝殻の閉殻筋部にポリキーターの寄生の影響が認められるところから、この部分に寄生の影響があらわれる場合は、貝にとって非常な害になることが推察され、このような貝は栓差しや手術時に閉殻筋が切れやすいようでありますし、また、環境条件の変異や管理の面で貝を衰弱させた場合、死にやすくなるようです。

## II 処理について

一般に大量に処理する場合がありますから、経済的濃度についての検討

が必要であると思われませんが、貝を有害な液の中に浸漬するのですから その浸漬の時間は出来るだけ短かくすべきであり、殺虫の効果は、濃度の高い程あがるわけであります。したがって、高濃度で短時間浸漬を行なうのが良いと考  
え、飽和食塩水を用いて試験を行なっています。

### 1. 飽和食塩水への浸漬時間について

処理を行なうにあたって、個々の貝について寄生の有無を判別することは不可能でありますから、すべての貝について浸漬処理をすることになりますが、その時に、貝の斃死や浸漬後の成長より見た貝の安全性を保つ必要のあることはいうまでもないことです。

7月下旬に3年貝で実験した結果、次のようになりました。

浸漬時間	斃死率(%)
15分	0
30分	15
1時間	23
2時間	36
3時間	40

このことより3年貝では、飽和食塩水への浸漬時間を30分間以内にするのがよいだろうと推察しました。

### 2. 浸漬直前の陰干しの効果について

軟体部に飽和食塩水がふれば有害であるから、その中で貝が開殻しないようにするため、浸漬前に操作してやる必要があります。そこで、次のように2年貝を使って実験を行ない、増重量や貝殻成長量との関係をみてみました。

- A : 対照
- B : 直接飽和食塩水に15分間浸漬しその後30分間陰干し
- C : 30分間陰干し後飽和食塩水に15分間浸漬しその後30分間陰干し
- D : 直接15分間浸漬

実験期間 : 38年9月25日～38年11月8日

表

	使用貝数(個)	処理10日間の斃死数(個)	増重量(%) (貝1個あたり)	殻高の成長量(cm) (貝1個あたり)	
I	A	50	1	4.3	0.68
	B	50	9	3.0	0.54
	C	50	1	3.8	0.58
	D	50	4	4.2	0.66

Cは斃死率がAと同程度であり、Bとは差があつて、また貝の増重量、貝殻成長量よりみると、CはBよりすぐれているようであるがAより劣っているようであります。この実験より、浸漬直前の陰干しは、閉殻操作として効果があることがわかりました。しかもこれは貝掃除とかねて行なうことができます。この場合、貝掃除のための足糸切断は処理にあたり、貝の中への食塩水の浸透がひどくならないかというけねんが残りますが、実験の結果から、足糸切断の有無によつて浸透に差はほとんど認められませんでした。

この浸漬前の陰干しで、貝殻表面が乾燥すれば飽和食塩水の浸透が悪くなるのか、やゝ殺虫率が下るようですので、なるべく乾燥させぬようにすることが好ましいと思います。

次に飽和食塩水に浸漬することになるが、その前に陰干しが終つたら一時(5分位)貝を海水中に入れて、貝に充分な海水を含ませて後飽和食塩水に浸漬してやるのが適當であります。

### 3. 浸漬時間と浸漬後の陰干しの効果について

処理は、2年貝と3年貝以上の2組に分けて考えています。2年貝のように貝殻の薄いものでは、飽和食塩水の浸透も早いし、また若年貝では、飽和食塩水処理に対し弱い傾向が見られます。

殺虫の難易は、寄生の状態にもよるようで、貝殻窩心部(貝殻のへこんだ部分)が二重になつていて、その間の泥の中に虫がいる場合や、内面泥棲管\*の中の虫は非常に殺虫が困難なようで、このような状態のものの多少により殺虫率に差がでできます。とくに、秋季に殺虫率を比較する場合には、内面泥棲管が大きく影響します。

貝に対する安全浸漬時間は30分間以内ですが、それでは殺虫率がひくいようですから、殺虫率を高めるのに役立つのではないかと考え、飽和食塩水に浸漬した後陰干しを行なつたわけです。浸漬後陰干しを行なう場合は、表IのBとDの比較よりわかるように、貝に対する影響も強くなるので浸漬時間はより短かくしなければならぬようです。

4年貝を使用して浸漬時間を15分間とした場合、その後の陰干し時間と殺虫率の関係を見たところ、次のようになりました。

---

\* 貝殻内面に出ている泥棲管で、まだその上に真珠層が分泌されていないもの。貝殻縁辺部に多いが、中央部にも相当ある。この泥棲管中の虫は5mm~1cm前後のものがほとんどであり(もちろん大型の虫もはいつている場合がある。)、処理によつてこれを殺すのは困難である。この内面泥棲管の出現は7月下旬~8月下旬に多いようであり、この中にはポリドラのみが認められ、他の虫はまだ認めていない。

実験期間：38年9月1日～19日

	15分浸漬	15分浸漬後 30分陰干し	15分浸漬後 60分陰干し
殺虫率	62%	81%	90%
内面泥棲管の中の虫を 除いて出した殺虫率	69%	91%	92%

この表から、陰干しの効果について見れば、陰干し30分、60分はいずれも陰干しをやらなかつたものより殺虫率は高く、30分と60分の陰干しを比較してみれば、全虫数に対する殺虫率は30分陰干しのものが低いようであるが、内面泥棲管が30分陰干しの組に比較的多かつたので、これを除いて殺虫率を出すと、91%と92%となり、殺虫率に差は認められなくなります。これによつて、陰干し時間は30分で充分であると考えられます。ここで、15分間浸漬後30分間陰干しを行なえば、効果的であることがわかつたが、この場合、若干衰弱する貝がみとめられる時があるので浸漬時間を短かくしてみました。

実験期間：10月2日～22日

	2分浸漬後 30分陰干し	5分浸漬後 30分陰干し	10分浸漬後 30分陰干し
殺虫率	42%	64%	83%
内面泥棲管の中の虫を 除いて出した殺虫率	52%	66%	88%

15分浸漬後30分陰干しと10分浸漬後30分陰干しの間にはほとんど差はないので、10分間飽和食塩水に浸漬した後30分間陰干しを行なうのが効果的ではないかと考えています。

次に、2年貝では、2分浸漬後30分陰干しと5分浸漬後30分陰干しとの間にほとんど差はなく、80～85%の殺虫率を示しているので、2～3分間飽和食塩水に浸漬し30分間陰干しを行なうのがよいのではないかと考えております。

以上のように、飽和食塩水に浸漬後、その貝を陰干しすることによつて殺虫の効果を一層高めることが出来るようです。

この陰干しは飽和食塩水への浸漬時間の延長とでも考えられるものであります。

貝を飽和食塩水中に浸漬した時、その中で適当にゆり動かし貝殻表面よりの

浸透をすみやかにしてやるのもよいことです。

#### 4. 飽和食塩水処理による貝への影響

飽和食塩水の使用は、ポリキーターの駆除に効果的ではあるが、反面、処理を誤れば、肝心な貝に対しても弊害をもたらすものであるから、駆除試験を行ないながら、一方では、貝に対する影響の程度を見るための試験を実施しました。

##### ○ハサキ形成量を指標とした影響試験

飽和食塩水にエオシンYを溶かした液に、貝を15分と1時間それぞれ浸漬したものを肉眼的に観察すると、15分浸漬では外套膜縁辺部が淡赤色に着色し、その部分に粘液の分泌が見られるものがありました。1時間浸漬では外套膜が収縮し、唇弁、鰓にも着色が認められました。このような観察結果から、飽和食塩水処理の影響は外套膜縁辺部に顕著に現れるようですから、貝殻のハサキ形成に影響が及ぶと考えられます。そこで飽和食塩水処理の後、ハサキを切り、一定期間後そこに新しく形成されたハサキを切り取り、重量を測定してみました。

#### 実験例Ⅰ

供試貝： 2年貝、貝掃除10分後2分浸漬しその後30分陰干し

実験期間： 38年10月9日～11月13日

	使用貝数	死貝数	10月30日の測定 平均値 (mg)	11月13日の測定 平均値 (mg)	26日間の総増 重量 (g)
対 照	15	0	110	187	8
2分+30分	15	0	100	220	10

#### 実験例Ⅱ

供試貝： 3年貝、貝掃除10分後10分浸漬しその後30分陰干し

実験期間： 38年10月17日～11月12日

	使用貝数	死貝数	10月25日の測定 平均値 (mg)	11月12日の測定 平均値 (mg)
対 照	9	0	57	371
10分+30分	9	0	39	442

以上の結果から、当初においては、対照よりやや悪い影響があらわれているようであるが、1ヶ月もすればその影響はほとんどなくなり、かえってハサキの形成は盛んになつてくるようです。



## 5. 処理の時期と回数

ポリドラ仔虫の着生盛期は秋と推定されているし、又貝の活力、気温、水温から考え、9月～10月に処理を行なつた方がよいと思います。そしてそれは表Ⅱよりわかるように避寒中における貝の斃死を軽減させるのにも役立てることができるようです。

供試貝：2年貝（大村湾奥部の漁協で養殖していた貝で、9月に15%の斃死を示した貝）浸漬時間は5、10、15分間で、その後の陰干しは30分間である。

処理日：38年10月1日

表 Ⅱ

	対 照	15+30	10+30	5+30
供 試 貝 数 (個)	707	642	277	257
避寒中の斃死数(個) (38年11月8日～39年5月6日)	170	49	13	17

各漁場により環境条件はことなるからいちがいにはいえませんが、だいたい避寒より1ヶ月前には処理を完了しておくべきでしょう。

さらに夏季においてもすでに仔虫の着生が認められるので、38年9月に大村湾奥部で2年貝にみられた斃死現象より考えて、7月～8月にも処理を施すことが駆除の効果を一層高めることになるだろうと思います。

## む す び

飽和食塩水の使用によつて、ポリキーターを相当程度に駆除できるということははつきりしましたが、その処理方法にはまだまだ検討しなければならぬいくつかの問題が残されているようです。

いままでの試験は、母貝のみを対象として行なつてきましたが、これから引き続き、施術貝に対しての処理問題や生産される真珠の品質との関連性などを追求していきたいと予定しておりますので今後とも御協力下さるよう御願いたします。



## 濃食塩水による貝殻寄生虫の駆除について (2)

(濃塩水によるポリキーターと付着物の除去について)

脇 専 一 ・ 山 口 菊 男

(三重県真珠貝養殖漁業協同組合)

最近の真珠業界には数多くの問題が山積されているが、貝殻寄生虫（ポリキーター）被害除去は問題中の問題であり、早く何とかならないかと希まない人はないと申し上げられよう。

寄生虫駆除については既に国立真珠研究所を中心とした研究機関で種々検討が進められ、駆除法として濃食塩水に浸漬する方法が最適とされ、既に昨年度本組合が中心となり、県下各地に於いて大規模な駆除実習を行い、多大の効果と操作の安全性を確認し、当研究会に於ても其の結果につき詳細発表したもので、一般の方には其の点、充分認識を深められていると思われるが、各経営者が意欲的に本塩水処理を実施するためには、尚前年度実施要領の完璧を期すと共にその他の諸点（即ち、貝の生態に影響はないか、貝殻の付着物に変化はないか、年間の回数は何回位か等）について更に究明し、現在の養殖法に革命的な要素の注入を念願としていましたが、幸いそれぞれ関係研究機関の方々の御好意あふれる御指導をいただき、本年初頭真珠貝殻付着物の除去と寄生虫の駆除（予防を兼ね）措置との併用を考え3年貝の越冬のまゝのものを……水温上昇を待つて……飽和食塩水に浸漬して見たところ、殺虫効果については尚若干不足の点はあるが、付着物除去については日を追うにつれ大体予想の線が出そうで、母貝養殖に於ては今後2年貝対照に本実験を続けて行けば、貝掃除と寄生虫の予防措置の二つの目的遂行可能の見透が得られて来たので、実験途中ではあるがここに発表して、敢て業界諸兄の御批判を仰ぎたいと考えます。本実験について終始御指導御支援を賜った国立真珠研究所及び水産試験場の方々に深謝いたします。

### I 試験の概要

試験実施場所：度会郡南勢町内瀬

供試貝及び数：37年度産（3年貝18～19g）500貝

試験実施時の条件：昭和39年4月18日

気温 25°C

水温 20.3°C (表面)

食塩水濃度 360g/海水1ℓ (過飽和)

液温 19°C

供試母貝の状態：越冬のものをそのままもちいたので籠(化繊籠)、貝とも付着物で非常に汚れ、ポリキーターに侵かされ貝殻が黒化した死貝を1籠で数貝認められたものを使用。

処理操作要領：操作 1. 筏より引揚げてから滞空30分  
操作 2. 再び通常海水へ5分(気泡の停止する間)  
操作 3. 淡水に10分漬浸  
操作 4. 濃塩水(過飽和を使用した)20分  
操作 5. 陰干し(貝殻表面が乾燥しないよう)30分  
操作 6. 筏に懸垂

## II 結果及び考察

### A) 寄生虫の状態について

4月18日に処理したものを10日後の4月27日に一部調査したら次のような結果が出た。(供試貝中一部摘出)\*

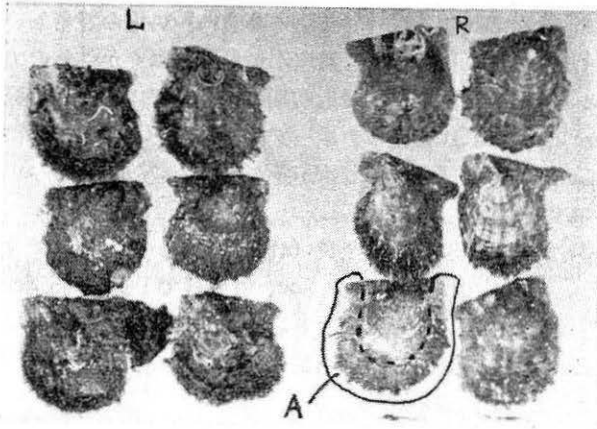
	調査 貝数	罹病貝		罹病貝の状況		棲息虫体の所見			
		個数	%	初期	中期	生	死	殺虫率	脱出 又は空
塩水 処理貝	38	10	26.3	8	2	4	3	43%	5
対照貝	41	11	26.8	4	7	—	—	—	—

罹病貝：貝殻内面にポリキーターの侵入による異常瘤起のあるもの又は泥管のあるもので、これ以外の正常貝は全く無傷貝。

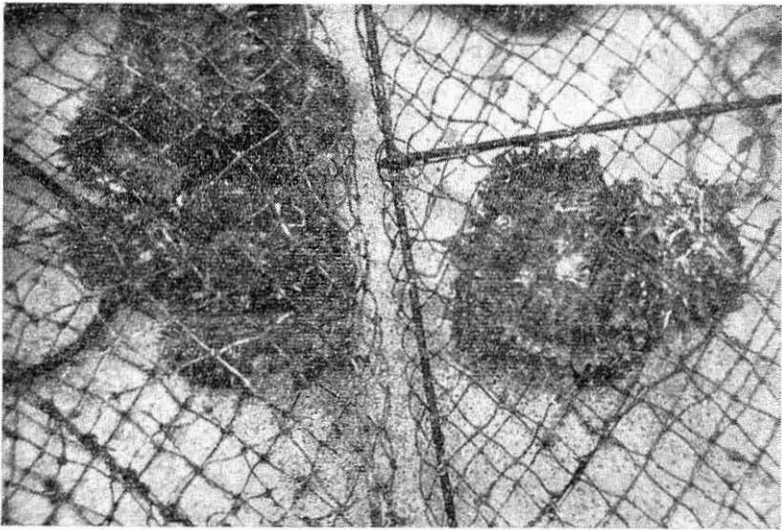
初期：侵入後間もない状態の患部で泥管の上に薄層のコンキオリンが被つたもので外観から泥管が露出した如き状況を呈する。

中期：初期よりかなり時間の経過したもので泥管に沿つて有機質を混じた真珠質の分泌がみとめられるもの、しかし未だ完全なチューブを形成していないものである。

\* 国立真珠研究所水本技官による。



- L : 対 照 貝
- R : 処 理 貝
- A : 端先部の虫  
体殺虫率が  
低かつた



越冬後 4月18日籠のまま濃塩水処理したものを  
6月10日撮影。

殺虫率：今回の資料中では殺虫率は低かつた。これは付着物の除去を主目的に実験したため、越冬後の付着物が非常に多いものを持ちいたため、付着物により罹病個所に濃塩水が侵入しにくかつたのではないかと考えられる。とくに侵入初期のチューブ内の虫体の斃死が少なかつたがこれは初期のチューブ開口部はとくに端先部に多く開いていて、その部分の付着物が多かつた。(写真参照)

#### B) 付着物の除去について

濃塩水処理後10日で、処理貝(38貝)対照貝(41貝)について容積量で付着物の比較をしたところ、処理貝では1貝平均3.8cc、対照貝で1貝平均5.4ccとなり、処理貝では殆ど減少していることになる。塩水処理15日後では更に減少している(実際計量測定はしていないが肉眼的に)即ち処理によりある程度付着物が脱落したと云うことが出来る。

尚付着物の種類では、ウズマキゴカイ、カサネカンザシの外面付着石灰管棲息虫は全て死滅しているが、石灰管等は残る。又小型海綿、ホヤ(とくにノンエキボヤ)も殆んど死に5~7日位で腐敗流失してこれらに付随していた泥等も流失してかなり殻表面は、きれいになつている。又フジツボ、カキ等は半数程度死滅しているが特に大型のものが生きていた。然し実験期間が短いため断定は出来ないが処理貝の成長は対照貝に比し勝るとも劣らないようであるので、これについても追試を試みたい。



# 核の1個入れと2個入れとの比較について

大 須 賀 正 二

(共栄水産株式会社)

最近の大珠（原核8ミリ以上）養殖は1個入れが普通になつていますが、これを2個入れにした場合どのような結果がでるか、即ち1個入れと2個入れとではどちらがとくかということについて試験してみました。

試験は現在継続中でその中間報告です。今後採取に至るまでにどのような変化があるか不明ですし又挿核時期や、漁場などの相違によつてこの試験結果が何処にもあてはまるものとは考えられませんが何かの御参考になればと思ひ発表する次第です。

## 1. 試 験 方 法

使用した母貝は4年貝の70掛り、80掛り、90掛りの3種類で、これに同一条件で挿核を行い、1個入れを実験群に、2個入れを対照群として比較検討している。

挿核は 38. 7. 19～26. に行い調査は

第1回 38. 9. 27～30. に又

第2回を39. 4. 17～20. に実施した。

試験漁場は次のとおりです。

施術漁場……………鳥羽市浦村

育成 〳 ……………全上

避寒 〳 ……………尾鷲市曾根浦

## 2. 中 間 結 果

第1回および第2回調査した結果、真珠貝の斃死率、脱核率、在核率などの状況は第1表、第2表および第3表のとおりです。

## 3. 考 察

中間調査の結果から次のことがわかりました。

①真珠貝の斃死率は2個入れの方が少々高い。

②脱核については入核数に対する比率は両者共略同じであるが施術員数に対する比率は2個入れの方がはるかによい結果になっている。

③施術後2年目では残存貝数は2個入れの方が多い。

(第1表) 母貝(80掛り)、原核(1ヶ入8.25、90%、2ヶ入8.0~8.5)

	1個入れ	2個入れ	期 日
1. 施 術 員 数	4,205員	2,273員	38.7. 19~26
2. 斃 死 員 数	907員	379員	38.9. 27~30
3. 斃 死 率 2/1	21.5%	16.7%	〃
4. X 線 透 視 員 数	3,298員	1,894員	〃
5. 同 摘 出 員 数	1,333員	366員	〃
6. そ の 他 脱 核 々 数	—	816ヶ	〃
7. 脱 核 々 数 計	1,333ヶ	1,548ヶ	〃
8. 施 術 核 数 対 する 脱 核 率	31.7%	34.1%	〃
9. 施 術 員 数 対 する 脱 核 率 7/1	31.7%	68.1%	〃
10. X線透視員入核数に対する脱核率	40.4%	40.8%	〃
11. 在 核 数	1,965ヶ	2,240ヶ	〃
12. 施 術 員 数 対 する 在 核 率 11/1	46.7%	98.5%	〃
13. 施 術 員 数 対 する 在 核 率	46.7%	49.3%	〃
14. X線透視員数に対する在核率 11/4	59.6%	118.2%	〃
15. 生 存 員 数	1,520員	1,200員	39.4. 17~20
16. 施 術 員 数 対 する 生 存 率 15/1	36.1%	52.8%	〃
17. X線透視員数に対する生 存 率 15/4	46.0%	63.4%	〃

(第2表) 母貝(80掛り)、原核(1ヶ入8.25、100%、2ヶ入8.0~8.5)

	1個入れ	2個入れ	期 日
1. 施 術 貝 数	2,000貝	2,884貝	38.7. 19~26
2. 斃 死 貝 数	269貝	478貝	38.9. 27~30
3. 斃 死 率 2/1	13.4%	16.5%	〃
4. X 線 透 視 貝 数	1,731貝	2,406貝	〃
5. 同 摘 出 貝 数	679貝	386貝	〃
6. そ の 他 脱 核 々 数	—	1,054ヶ	〃
7. 脱 核 々 数 計	679ヶ	1,826ヶ	〃
8. 施 術 貝 数 に 対 す る 脱 核 率	33.9%	31.7%	〃
9. 施 術 貝 数 に 対 す る 脱 核 率 7/1	33.9%	63.3%	〃
10. X線透視貝入核数に対する 脱 核 率	39.2%	37.9%	〃
11. 在 核 数	1,052ヶ	2,986ヶ	〃
12. 施 術 貝 数 に 対 す る 在 核 率 11/1	52.6%	103.5%	〃
13. 施 術 核 数 に 対 す る 在 核 率	52.6%	51.8%	〃
14. X線透視貝数に対する 在 核 率 11/4	60.8%	124.1%	〃
15. 生 存 貝 数	757貝	1,510貝	39.4. 17~20
16. 施 術 貝 数 に 対 す る 生 存 率 15/1	37.9%	52.4%	〃
17. X線透視貝数に対する 生 存 率 15/4	43.7%	62.8%	〃



(第3表) 母貝(90掛り)、原核(1ヶ入8.0、100%、2ヶ入7.75~8.25)

	1個入れ	2個入れ	期 日
1. 施 術 貝 数	1,500貝	1,210貝	38.7. 19~26
2. 斃 死 貝 数	262貝	268貝	38.9. 27~30
3. 斃 死 率 2/1	17.4%	22.1%	〃
4. X線透視貝数	1,238貝	942貝	〃
5. 同 摘 出 貝 数	517貝	149貝	〃
6. そ の 他 脱 核 ヶ 数	—	407ヶ	〃
7. 脱 核 ヶ 数 計	517ヶ	705ヶ	〃
8. 施術核数に対する 脱核率	34.5%	29.1%	〃
9. 施術貝数に対する 脱核率 7/1	34.5%	58.3%	〃
10. X線透視貝入核数に対する 脱核率	41.7%	37.4%	〃
11. 在 核 数	721ヶ	1,179ヶ	〃
12. 施術貝数に対する 在核率 11/1	48.0%	97.4%	〃
13. 施術核数に対する 在核率	48.0%	48.7%	〃
14. X線透視貝数に対する 在核率 11/4	58.2%	125.1%	〃
15. 生 存 貝 数	522貝	588貝	39.4. 17~20
16. 施術貝数に対する 生存率 15/1	34.8%	48.6%	〃
17. X線透視貝数に対する 生存率 15/4	42.2%	62.4%	〃

# ピースの扱い方 (続き)

町 井 昭

(国立真珠研究所)

前号ではピースの構造の概要とその性質について述べ、ピース作製および使用上に必要と思われる事項についても少し触れたが、今回はなお不足と思われる点について補足してみた。

## 有機質はどんなときに分泌されるか

貝殻がこわされたり、寄生虫に侵されたりすると、貝殻の損傷部にはこげ茶色の有機質（殻皮、コンキオリン）が多量に分泌される。有機質が相当量沈着すると、その上に稜柱層ができるが、これもある期間沈着すると分泌が止まり、その上に光沢のある真珠層が沈着する。これは貝殻修復の典型的な経過であるが、この働きをするのは外とう膜の貝殻面上皮である。この間に上皮細胞の型態はそれぞれの分泌物を分泌するところの特徴ある形態をとりながら漸次変化してゆき、ついに正常の状態（へん平な上皮）にもどる。

真珠のばあいには、真珠袋から有機質の分泌が極力抑制されるよう注意が払われるが、外とう膜のばあいとまったく同様の現象がおこる。これは前記のような性質をもっている外とう膜から切り取ったピースを使うからにはほかならない。真珠袋のばあい、形成初期には分部的にでも有機質が分泌される状態にあることが非常に多い。浜揚げ真珠にみられるしみの多くは初期における有機質の沈着によるものである。

ピースまたは真珠袋にこのような異物質を分泌させるように働きかける原因についてはまだ十分に説明される状態にまで研究されていないが、前号でも触れたように、淡水の作用、異常な摩擦、高塩分水、薬品の作用等通常と違った状態のもとでは上皮は敏感に反応して有機質を分泌するに至るのである。移植後（核入れ手術後真珠袋が形成されてから真珠層が分泌されるに至るまで）におこる有機質の分泌は生理的必然といえるものであり、避けることは無理であろうが、ピースに対して人為的に加えられる種々の刺戟はできるだけ少なくするように処理されなければならない。こうすることによつて不要な成分の分泌を少しでも抑えることができるであろう。真珠袋の上皮は上記のような性質

をもっているのです。扱りに当たつて注意しなければならないことは確かであるが、このような性質をうまく利用すればブルーだまやピンクのものをつくる手段とすることができるであろう。

## ピース貝とピース

真珠成分の分泌は若い貝ほどさかんであるから、充分巻くことを期待するならば、ピース貝は1～2年のものを使う方がよい。しかし小さい貝ではピース作製のときに手間がかかり、正確に切断することがむずかしいため、および若い貝のピースを使つたばあい産出される真珠はクリーム系が多いといわれているため使われない。ピース貝には主として3年および4年生のものが使われるが、3年生のものは大きさも手ごろであり、分泌も相当さかんであるので、ピース貝として適当であるといえる。ピース貝として具えるべき条件は“はさき”のよく伸びている元気なものである。田辺ら<sup>4)</sup>はピースおよびピース貝について経験的に得たことがらをまとめ詳細にわたり発表している。同氏らはピース貝は別に養成し、3年貝のはさきのよく伸びていて、変形してないもの、貝殻外面の色は赤い放射状の模様のあるいわゆる“あさひ貝”がよいとしている。

最近では貝殻に多毛類の寄生している貝が多いので、貝殻に傷があるかないかもよく確かめる。ピースを切り取る部分に接している貝殻に傷があつて有機質の分泌が行なわれつつある貝からはピースを切り取らない方がよい。それは先述のように、異常な刺激を受けたピース上皮は真珠袋形成後もやはり異常な分泌をする可能性があるからである。ただし、以前に有機質を分泌していたものでも、ピース作製当時に黒い有機質が分泌されていなければ使つてさしつかえない。

## 薬品処理

ピースを薬品で処理して良質の真珠を作ろうとした試みは相当古いが、ながい間成果をみずに経過した。1957年高岡<sup>3)</sup>はピースに種々の薬品をぬつて核入れ手術を行ない、表1のような成績を得ている。すなわち、ピースに各種の栄養剤、ホルモン、色素等をぬつて、これより形成される真珠袋に活力を与え、巻きを促進し、色をよくするということが目的であつた。同氏は主目的は達成されなかつたけれども大へん興味深い成果を収めている。その後数人の人々によつてもピース処理試験について公表された。<sup>1,2,5)</sup>

薬品を使うということはつぎのような目的がある。

1) 普通品または良質だまの品質の向上をはかる。

すなわち色はホワイト系からピンク系のものを産出させ、巻きを促進し、つやをよくする。

2) くずだまの防止

すなわちピースの活力を調整し、有機質の分泌を抑える。

表1 ピース薬品処理試験の結果(高岡1957より抜き書)

		メチオニン 1/50,000	ミノルモン α-ナフチル酢酸 1/10,000	イルミノール R <sub>2</sub> 1/50,000
		実 験 対 照	実 験 対 照	実 験 対 照
施術年月日		1952. 8. 22	1948. 9. 5	1953. 7. 23
採取年月日		1953. 11. 20	1948. 11. 11	1953. 11. 20
核(分)		1.8 2.0 2個入	1.1, 1.2, 1.3 3個入	1.8, 2.0 2個入
(たまの品質)	A	13(50%) 4(21%)	10(53%) 6(37%)	17(40%) 4(21%)
	B	13(50%) 14(74%)	7(37%) 7(37%)	25(57%) 14(74%)
	C	0 1(5%)	2(10%) 5(26%)	1(3%) 1(5%)
	合計	26(100) 19(100)	19(100) 19(100)	42(100) 19(100)
しら、脱核		26 13	1 2	16 13
		ポリタミン 1/200	ビタミンB <sub>1</sub> 1/10,000	注 A: 巻き、光沢、色調のよい真円のもの B: Aには劣るが製品にできるもの C: 稜柱だま、極端なうすまき、どくず等
		実 験 対 照	実 験 対 照	
施行年月日		1955. 9. 16	1952. 8. 21	
採取年月日		1956. 11. 20	1953. 11. 20	
核(分)		1.2, 1.3, 1.4 3個入	2.0, 1.8 2個入	
(たまの品質)	A	21(10%) 3(4%)	5(25%) 4(21%)	
	B	145(73%) 61(76%)	13(65%) 14(74%)	
	C	34(17%) 16(20%)	2(10%) 1(5%)	
	合計	200(100) 80(100)	20(100) 19(100)	
しら、脱核		5 4	24 13	

1) の目的のためにはヨークレシチン、感光色素等が用いられ、また2) のくずだま防止のためには、細胞賦活作用のある感光色素および作業時における細菌による感染症の防止のために抗生物質が用いられ、それぞれ成果を得たことが発表されている。

またピースそう入を容易にし、しらだまの産出を防止するためにピースを着

色することはひろく行なわれており、この色素については1962年 宮内<sup>2)</sup>によりエオシンYが従来のもよりよいことが発表された。ピース染色のための色素は、マーキエロクローム、エオジン、メチレンブルー、色ベに、その他が使われ、効果があげられている。いずれもピースはそう入位置を確認できる程度に染めて使用する。濃度は大体0.1~0.5%である。

## 処 理 方 法

ピースは切断されてから手術に使われるまで、まな板上で数分から20分間くらい放置される。ピースを湿らせるために海水を使うことはさきに述べたが、この海水に薬品をとかしてピースにぬるようにすればよい。これまでに公表された薬品処理の方法は薬液をピースにぬるだけという簡単な方法がとられている。多くのばあい、この方法によつて目的が達せられるであろう。ほかに、生きているピース貝を処理しておいて、活性化したピースを使うという方法も考えられるが、いまのところこれについては試験がなされていない。

## くすりの保存と取扱い

養殖場では湿気が多いから、保存にはとくに注意する必要がある。くすりは吸湿すると変質して使えなくなるものが多いから、使用後は残りのものは密封しておく。また、日光の直射しないところに置くようにする。とくに色素類は湿気、日光は禁物であるから、直射光の当らない乾燥した場所に置く必要がある。

湿気から守るためには特別の容器、デシケーターに入れておくとよい。デシケーターはすり合わせのふたがついているから、ふたと本体の接するすり合わせの部分にワセリンをうすくぬり、乾燥剤を入れておく。乾燥剤には塩化カルシウム、硫酸、シリカゲル、その他があるが、シリカゲル中粒青または青白混合のものが使いやすい。シリカゲルは青いうちは湿気を吸う力があるが、吸湿するにつれて紫から赤色にかわる。赤くなつたら充分吸湿してしまつて乾燥能力がなくなつたしるしであるから、赤からもとの青色になるまで、こげないようにとる火または乾燥器にかけて乾かす。こうすることによつて何べんも再生して使用することができる。アンプルに封じてあるものは口を切つたらそう長く保存できないものが多いから無駄がないよう注意する。

現在市販されている薬品にはつぎののべるように、細胞賦活剤、栄養剤、抗生物質、色素類等種々あり、それぞれ効能がうたわれている。これらを表示するとつぎのようになる(表2)。

表2 これまでに公表されたピース処理のための薬品と使用法など

	作用	使用目的	使用法	
ヨークレシチン	細胞の賦活	巻きの促進色、つやをよくする	海水でうすめ10%とする	製品名パールチン 栄養物、純卵黄油
感光色素類	細胞の賦活	きずの防止 巻きの促進		プラトニン、ネオキシニン イルミノール等あり
クロールテトラサイクリン	静菌	きず、斃死の防止	50ppm海水溶液	製品名パーラツプ オーレオマイシン
エオジン Y		ピースの着色	0.5%海水溶液	溶液は赤色で、黄緑の蛍光がでる
マーキユロクローム		同上	0.04%海水溶液	市販のもの(2%)を50倍とする 赤チンと称しているもの

## ま と め

ピースを薬品で処理するばあい、先述のように単に薬品をピースにぬるだけという方法がとられている。ピースの上皮はちよつとした刺戟に対して反応し、有機質を分泌する性質があるため、このような方法ではどうしてもきずが大きくなりやすい。従来試験成績をみても、著者の経験によつても、実験群においては、きずだまは何も処理しない対照群より多いか同じくらいでいるように思う。表1においても、しらおよび脱核を考慮に入れると、薬品を使った試験群においては、A級品の増加するばあいでも、くずの出る率が多くなる傾向があることがうかがわれる。これはその薬品を使うこと自体および使用方法に問題があるためであると考えたい。今後はピース貝を処理してよいピースを作ることやピース自体を処理するもつとすぐれた方法ならびに薬品のでることが期待されている。さらにそういう処理を施したピースを使つて作業した作業員に活力をつけ、巻きを促進することも考慮されている。たとえば、すでに著者が行なつたヨークレシチンの注射は巻きをよくすることに効果があつたが、注射が面倒なことと、浜揚げだまの色の点で満足されなかつたために一般にひろまらなかつた。しかし、薬品を使うことは今後の努力によつて大きく進歩し、真珠の品質向上のために薬品が一般に用いられるようになるであろう。

## 文 献

- 1) 町井 昭・高山 活夫 1962 ヨークレシチンの使用と真珠の品質  
真技研会報 1 (1) 1
- 2) 宮内 徹夫 1962 ピース染色の新しい色素と無菌的な挿核施術について  
真研会報 6 (3) 31
- 3) 高岡 齊 1957 真珠養殖の研究 (I) 国立真珠研報 3 : 246
- 4) 田辺 時生・田畑 良 1957 中小珠の施術について 真研会報 5号17
- 5) 山下信一郎・安井 茂夫 1961 感光色素処理による細胞(外套膜ピース)  
が優良真珠を形成する実例と考察 同 上 6 (2) 14





+++++++  
+ 全 真 連 だ よ り +  
+  
+  
+  
+++++++

## 阿 児 地 区 真 珠 技 術 研 究 会

第14回真珠技術研究会は4月25日、新築された立神真珠組合で開催された。当日は挿核も始まり忙がしい中30余人の聴視者を得て最後の質疑応答まで熱心に行なわれました。

中井組合長の挨拶に始まり全真連の浜本専務の挨拶に続いて研究発表に入り国立真珠研究所の植本技官から時期的に最も関心のもたれている「母貝仕立について」発表がありました。中食後同じく研究所の水本技官から、最近皆の関心を深めつつあるポリキーター、セルカリア等寄生虫について発表がありました。研究発表の後質疑応答がかわされ3時半すぎに閉会しました。

今回の講師及びテーマは次のとおりです。

### 1. 母貝仕立について

国立真珠研究所 植本 東 彦

### 2. 寄生虫について

国立真珠研究所 水本 三 朗

### 質 疑 応 答

問…卵抜について現行の証明をしていた方がいいわけですがおさえをかければ卵は抜けてなくても良いというのはいかがでしょうか。

植本…卵が抜けてないというのはカゴの中の貝の位置によるもので貝の位置を変えて全部卵を抜いた方が良いでしょう。

問…御座へ行つて卵抜をするが他にあの様な漁場はないか。

植本…御座の漁場は砂によつて暖められた潮が動くので良いとされているが今のところその様なところは他にない。

問…潮の満ちる時と干いて行くときとどちらが良いか。

植本…干いて行くときの方がよい。

問…ポリドラに犯された貝をピースに使つても良いか。

水本…その状態によるが軽症程度ならさしつかえない。

問…クリーナーで貝掃除をする人があるがどうか。

太田…使い方によつて影響があると思うが上手に使えばさしつかえない。船越

の組合長の話では母貝は良いが作業員については黒い珠が出る様に言っていた。

問…竹カゴとポリエチレン（プラスチック）のカゴとの違いは

植本…これから実験する予定であるので何んとも申し上げられない。

問…セルカリアのついた貝をとりの漁場へ持つて来ても影響ないか。

水本…セルカリアは的矢湾では、水温の低下が早くトウゴロウイワシの出で行くのが早いのでセルカリアは繁殖しない。だからよそから持つて来た貝についても漁場によるが他の貝には影響ない。

問…母貝と浜揚貝をピースに使った場合どうか。

太田…ピースの年齢的な意味で母貝の方が良い、巻きに差がある様に思う。

出席者

国 研	太田 繁	植本 東彦	水本 三朗		
水 試	木村 三郎				
立 神	大西 楠也	山本 治	小林 源治	大谷 馨	
	川面 利孝	浦谷達治郎	小林 正旗	出口 周三	
	井上 敏夫	前田 公司	井村 榮藏	川添 久雄	
	大谷きよ子	小林 七助	川添	山本 義郎	
	若田 俊夫	平古 昭吾	平井 平八	番条 圭三	
	向井 新治	安部 末吉	中井 好文	山家 政治	
	北山 一郎	舟戸 弘	尾崎 桂治	森下 義和	
	森下 貫一				
立神漁協	中井組合長				
全真連	浜本 専務	浜口 潔	番匠 典子		

## 紀州地区真珠技術研究会

第15回真珠技術研究会は6月1日、引本の公民館で開催されました。当日は紀州各地から40名余の熱心な聴視者を得て開かれました。

全真連の浜本専務の挨拶に始まり、国立真珠研究所、町井技官の「細胞について」、植本技官の「母貝仕立について」と研究発表がありその後すこし質疑応答がかわされ最後に水産試験場の木村技師より最近問題になっている「X線のとりあつかいについて」説明があり4時半ごろ閉会しました。

今回の講師およびテーマは次のとおりです。

### 1. 細胞について

国立真珠研究所 町井 昭

2. 母貝仕立について

国立真珠研究所 植本 東彦

3. 真珠用X線装置の取扱いについて

水産試験場 木村 三郎

質 疑 応 答

問…粘液からできるのは殻皮だけか。

答…粘液は殻皮も稜柱層もつくる。

問…ピースにぬるパールチン等といつしよに蒸留水を使うのはいけないか。

答…海水でするほうがよい。

問…海水を使う場合どの程度の比重がよいか。

答…22～23が良い。

問…感光色素を使う場合はどうすればよいか。

答…それは処定どおり使用してよい。感光色素にはブドウ糖などを含み体液と同じようにしてある。

問…ピースの厚さは、うすいのがよいか厚いのがよいか。

答…元気な貝は厚く、元気のない貝はうすいとなつてはいるが、はつきりしたことはわかつていない。

問…ピースに使う貝も抑制した方がよいという意見があるかどうか。

答…抑制した貝を使うときれいな珠ができるが巻きが悪い。

問…ピースの乾燥の程度はどうか。

答…時間的なものではなく、その状態による。比重でいえば低い方では15、高い方では25程度だと思ふ。

問…しめしておいた場合何日もつか。

答…2日間ぐらひは生きてはいる。

問…ピースの裏側を使つた場合。

答…裏側の部分がシミとか突起となる、シラ珠となる場合もある。

問…ピースをたてに使つた場合。

答…そのピースの部分が突起となる。

出 席 者

国 研 町井 昭 植本 東彦

水 試 木村 三郎

紀 州 速水 修 浜口 勝 山本 国雄 小端 英治

大谷 勝 植村 広 植村 忠男 住屋 寛

奥村 支雄 家崎幸太郎 奥村 親 竹内 政明

竹内 文市	家崎 孝夫	倉田 英明	奥村 倉助
倉田 新治	民部 義夫	和泉 卓司	北村 国一
山本 久幸	西村 保夫	駒田 九男	筒井 紀雄
柳 登志雄	浜口 勝美	畦地 誼行	東 浩之
平本 久夫	奥村 勝治	吉田 郁子	奥村 征代
奥村あつ子	塩田やよい	佐々木善行	柳 長次郎
尾上 一徳	家崎 栄次	浜田 浩	
全 真 連	浜本 専務	浜口 潔	
		番匠 典子	

## 第1回九州ブロック 真珠事業協議会

真珠養殖業が包蔵している問題点に対処、解決を図るため、真珠養殖業者と地方行政当局、並びに農林中央金庫と隔意のない意見を交換するため第1回九州ブロック真珠事業協議会を、水産庁と本会との共催で6月19、20日の両日、長崎市松ケ枝町、長崎県水産試験場会議室において開催した。

水産庁よりは着任早々の猿田漁業振興課長と谷口真珠係長が、九州各県からは夫々担当官が、又農林中金からは深津融資第三部長を始め九州各県支所の担当者が、本会からは御木本会長以下高橋、浜本両専務、井上、田辺両常務、平賀部長、外九州地区内の真珠漁協長が出席し極めて熱心に意見交換が行われ、今後その成果が大いに期待される。

会議の概要は次のとおりである。

(第1日)

1. 主催者として、猿田漁業振興課長、および御木本会長の挨拶に続き、来賓を代表して梁瀬長崎県水産部長および農林中金深津融資第三部長の挨拶があつた。
2. 最近における真珠一般情勢について。

水産庁谷口真珠係長より、核、母貝、加工、輸出、海外真珠の現況について説明、特に今後の真珠養殖は品質のよい珠をつくること、全国的な組織

を更に強化して進むことの必要性について強調された。

3. 全真連の活動状況について御木本会長、浜本専務より説明。
4. 各県の施術目標の実施状況、密殖防止措置等今後の施策について。  
御木本会長が議長となり各県毎に説明その概要は次のとおりである。

① 長 崎 県

真珠区画漁業権は本年4月切替えを完了した。方針としては十分な漁場を与え効果的に利用されるよう漁場の配置関係についても考えた。浮設筏数については業者の自覚に期待し条件制限など付けなかつた。切替後、一部手直しを要する漁場や避寒漁場が不足しているので再検討している。42年度には5,200万貝の施術達成を目標としている養殖技術の向上を図るため真珠組合と連繫をとつて関係者の教育を積極的に進めたい。又母貝養殖については県内需要がまかなえるように育成したい。

② 熊 本 県

35年以降既存業者育成のため免許方針を定め原則として新規免許を停止していたが昨年地元漁民を主体とした小規模経営の者に一部試験的に免許した。密殖防止を主眼として指導しているが業者も自主的によくやつている。真珠漁場で母貝養殖もやつている特殊なものについては、真珠と母貝の両漁業権を重複して免許しているが免許に当つて両漁業権が異なつた者に免許されることのないよう事前に措置している。真珠稚貝は全て県外から移入している。

③ 佐 賀 県

27年三重県業者によつて始められ、39年1月漁業権の切替えを完了した。真珠品質向上のため漁場を広く又一湾一業者というようにしたい。密殖の状態はあらわれていないが筏数の規制を次のように実施している。今後も密殖防止に重点をおく考えである。

真 珠 筏	1 台	600m <sup>2</sup>
真 珠 貝 筏	〃	400m <sup>2</sup>

を基準に筏数の限度を算定。

④ 福 岡 県

業者も2人で真珠漁場の面積も47,000m<sup>2</sup>程度である。今後各県の状況を参考にして検討していきたい。

⑤ 大 分 県

37年より密殖となつた。今回の漁業権切替えに当つてはこれに対処して次の方針に基づいて実施した。

- (1) 真珠養殖と母貝の需給関係を乱さないこと。
- (2) 漁場の老化防止。
- (3) 母貝養殖より真珠養殖に転向する場合協業化の促進。

密殖を防止するため各漁場毎に浮設する筏数の限度を免許に当り条件制限として付けている。その限度は次の基準に基づいて算定している。

真珠筏1台当り990㎡(300坪)、1台吊貝数5,000貝以内。

真珠貝筏1台当り495㎡(150坪)

経営体数197のうち県内業者167で全て母貝養殖からの転向者で、しかもその規模も小さく施術数は10万貝以下である。経営規模の大きい県外業者とこれら沿岸漁業からの転向者との格差が真珠漁協設立を遅らせている原因の一つとなっている。今後は真珠業者と母貝養殖を行つている漁業協同組合長とによつて組織している大分県養殖真珠事業振興会の脱皮を図り真珠と母貝の部会に区分し、真珠業種別漁協の設立を積極的に進め全真連に参加するよういたしたい。

稚貝の購入を希望される県は予め必要量を大分県養殖真珠事業振興会を通じ連絡するようにしてほしい。

#### ⑥ 宮 崎 県

真珠は細島湾で三重県業者が1人、浦城湾で地元業者1人が養殖している。赤水湾は県外業者が避寒漁場として利用している程度で現在のところ密殖に陥る心配はない。近年北浦湾地区で稚貝採苗が盛んになつて来た。今後稚貝供給県として育成したい。採苗については自主的な規制を指導いたしたい。

#### ⑦ 鹿 児 島 県

最近真珠養殖の新規漁場の開発の要請が多くなつてきた。免許については基本方針を定め処理している。県地元、業者で充分協議の上免許している。新規免許については今後施術枠の持込みを条件に考えたい。漁場計画に当つては経営の安定を図る見地から原則として30万貝位施術できる広さにしたい。母貝養殖については真珠養殖との需給関係を考へている。

真珠品質保持のため漁場と筏数については次の基準によつて指導している。

真珠＝鹿児島海区は1台当り1,000㎡大島海区2,300㎡、1台の吊貝数4,000貝以内とし貝数を基本にして規制している。

### 5. 各真珠漁協の活動状況、および要望事項

① 長崎県真珠漁協

西村組合長が概況について説明。農林中金の生産資金については次のことに留意して組合員を指導している。

- (1) 融資によつて当年ものが増加しないこと。
- (2) 系統出荷量の増加。
- (3) 自己資本の充実。

(水産庁への要望事項)

- (1) 真珠研究所大村支所の人員、施設の拡充。
- (2) 真珠養殖共済の掛金率の低下を図つてほしい。

(全真連への要望事項)

- (1) 真珠品質低下の傾向に対し強力な打解策を。
- (2) 全真連の増資は単協を充実した後で。
- (3) 粗悪真珠集荷対策をより積極的に。
- (4) 中央で税務問題を積極的に取り上げよ。

② 対馬真珠漁協

斎藤組合長が概況説明。

(要望事項)

- (1) 漁業権設定に伴う、漁場料について行政的な指導措置。
- (2) 施術工不足の現状に鑑み養成機関の設置。

③ 鹿児島県真珠漁協

黒木組合長が概況説明。

(要望事項)

- (1) 地元小業者の生産資金について系統機関で考えてほしい。
- (2) 県外大手業者も地元の共販体制に協力するようにしてほしい。

④ 佐賀県真珠漁協

吉田組合長が概況説明。

(要望事項)

- (1) 真珠漁場と母貝漁場との調整を考えてほしい。
- (2) 真珠貝寄生虫対策の研究。

6. 真珠漁協の設立、及び全真連への加入について。

高橋専務より熊本県の真珠漁協に対し全真連への加入を大分県に対し真珠漁協の設立と全真連への加入を依頼、両県共もその方向で努力する旨回答があつた。



(第2日)

1. 真珠金融の現状と問題点について。

農林中央金庫 深津融資 第三部長より説明があり、特に次の点を強調された。

- ① 粗悪真珠を市場から追放すること。
- ② 海外への販売体制を関係者が協力して強化すること、このためには全真連の強化が必要なこと。
- ③ 生産資金は無謀な増産をさけ経営の安定を図るよう有効な使用を図ってほしい。

2. 各県における農中融資の状況。

各支所から説明の後、各地区真珠漁協から具体的な要望が出された。

国立真珠研究所蓮尾大村支所長より現在までの研究概要と今後の計画について説明があり正午過ぎ散会。

出席者

水産庁漁業振興課	課長	猿田達雄
〃	真珠係長	谷口定利
真珠研究所 大村支所	所長	蓮尾真澄
〃	技官	山口一登
福岡県 水産課	技師	松永英昭
〃		小川楠之
佐賀県 水産課	主査	藤原要
〃	技師	西田隆英
〃 真珠漁協	組合長	吉田寛司
〃 山勝真珠		星野静夫
熊本県 水産課	課長補佐	中島兵衛
〃	技師	平原宏一
〃 真珠漁協	組合長	西岡勝次
〃	理事	岩橋六三
鹿児島県 漁政課	課長補佐	紀伊原益雄
〃	技師	東郷庄三郎
〃 真珠漁協	組合長	黒木貞夫
宮崎県 水産課	技師	河野享太郎
〃	〃	河野孝吉
〃 宮の浦漁協	組合長	中国勇光

大分県	水産課	課長補佐	古田豊
〃		主任	武田年秋
〃	真珠振興会		邦須正徳
〃			協谷求
長崎県	水産部	部長	梁瀬兆世
〃		次長	小関信章
〃	漁政課	課長	中富山孝次
〃		佐師	中島康治
〃			副島三郎
〃			針尾俊彦
〃			田島博樹
〃			清水昭治
〃		金融係長	藤浦一夫
〃		主査	岩崎正博
〃			佐々木一之真
〃	水産振興課	課長	中永元光
〃		佐	野村力
〃		長	宮内喜
〃		査	川崎謙太
〃		師	浜島口正
〃	水産試験場	部長	山西村金
〃		長	佐々木甚
〃	真珠漁協	組合長	田崎三
〃		事	塩見秀
〃			楠木種
〃			中島高
〃			浜平賀滋
〃	対島真珠漁協	監事	古藤嘉
〃		組合長	
〃		副組合長	

長崎県 対島真珠漁協

〃 楠木真珠

〃 田崎真珠

〃

農中 融資第3部

〃 福岡支所

〃 長崎支所

〃

〃

〃 熊本支所

〃 大分支所

日本真珠振興会

〃

日本真珠輸出組合

〃

〃

御木本真珠会社

〃

全 真 連

〃

〃

〃

〃

〃

参 事

部 長

貸付第2課長

所 長

業務課長

調 査 役

業務課長

〃

専 務

理 事

専 務

〃

仕入部長

〃 次長

会 長

専 務

〃

常 務

〃

部 長

築城猪佐美

田 口

古 山

塩 田

深津吉郎

笠間信司

西川一夫

中島俊治

笠原信一郎

平沢一郎

大平慶二

諏訪光一

三谷勝次

森 正 男

石井秀夫

井上彌栄

宇田川忠保

加藤勇治

御木本美隆

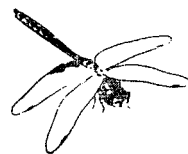
高橋泰彦

浜本忠史

井上 巖

田 辺 耕 治

平賀太寿雄



## 大月さんの長逝を悼みて

井 上 巖



大月さんがなくなつたことは業界の一大損失であるが、自分としてもまたとない師父を失い、淋しい限りだ。

その高潔な人格と、信念の強い優れた指導者であつたことは今更いうまでもない。頼まれたらいやということができない大月さんであつた。手形保証についても断り切れず、幾人かの保証債務を弁済された。

戦後今日まで業界の誰彼と手を挙げた人も数多くあつたが、被害者の一人に、必ず大月さんが加わつていた。

厳しそうなあの風貌と無口に対し、初めてあつた人は誰もが近づき難いと感じるだろうが、真は心根のやさしい人であつた。

自分も業界にお世話になつた当初は、何と取りつきにくい、むつかしい人だろうと、敬遠していたが、お目にかゝり話す機会がある毎に、その先入感を打消して、凡そ外観と正反対の人であり、俳句もやり情味豊かな人であることを知り、慈父の如く親しめる方として、心からおしたいしていた。

酒はとてもお好きで、飲むほどに、酔うほどに、御機嫌がよくなつて、談論風発、議論は尽くるところを知らず、長くなつて、酒席での大月さんの隣席は、皆んな避けていた。あの厳格そうな魁偉な風姿ながら、一種独特な愛嬌に富んだ笑顔は、何んともいえぬ魅力だつた。

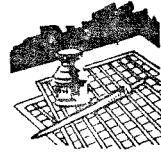
全国漁協の施策に対しても、真剣に相談にのつてくれて親身になつて解決を図つて頂いた。われわれは何か重大事件の度毎に大月さんを訪ねて御意見をきかせてもらつた。ロツト売の相談に行つても、買手の立場というより自分のこととして、その処分に欣然同意してくれた。

真珠業界はこの偉大な指導者により、幾度か難局を切り抜けて今日の隆盛を遂げたが、今やその人もなく、いしれぬ寂寥を感ずる次第である。

われわれ真珠業界は挙げてその長逝を惜み送るに業界葬を以てした。大月さんはこれに値するたゞ一人の人ともいえる。

深甚の哀悼を表し、御冥福をお祈りしたい。(全真連常務理事)

## 編 集 後 記



- 皆様のお手元に第3巻、第2号をお送りいたします。
- 真珠業界の長老であり、業界功績者の大月菊男氏が7月13日「こうえん」として御逝去なされました。  
真珠業界発展の為、情熱、誠意を第一義として幾多の功績を残されたことに感謝し、御霊の安らかに昇天あらんことをお祈りいたします。
- 真珠の嗜好も小さいものから大きいものに移向しています。大きいサイズの手術貝数もふえてきていると思います。大きい珠の専門の共栄水産KKの大須賀氏に有意義な論文をいただきました。参考にして下さい。
- 問題のポリキーターの駆除について長崎、大村湾での報告をいただきました。いままでの駆除結果を参考にされ、漁場に合った方法を考えて実行して下さい。
- いつものことながら研究会報の原稿が少なく、今日までのびてしまいました。各地の会員の皆様も出来るだけ、どんな短文でも結構ですから編集局まで御寄せ下さい。

昭和39年9月15日発行

第3巻 第2号会報  
(通巻第47号)

三重県伊勢市岩淵町84番地ノ2  
真珠会館内

発行所 全国真珠養殖漁業協同組合連合会  
電話(伊勢局代表)⑥4147番

編集責任者 浜 本 忠 史

印刷所 三重県伊勢市岩淵町140  
神都印刷株式会社  
電話(伊勢局)⑥2230番